

言語と性差研究における理論の回顧と展望

阿部圭子

1. 言語と性差研究の背景

アメリカの女性解放運動は、その年代と内容に応じていくつかの時期に区分することができる。その第一期は、1840年代に始まった。この時期に活躍した女性、Margaret Fuller は、性による差別を否定し、Elizabeth Stanton は、奴隷制廃止と女性解放のための運動を組織することを目指し、Lucretia Mott は、女性に対して抑圧的であるキリスト教の絶対主義を廃止しようと努めた。この期の女性解放運動は奴隷制撤廃運動と共に平行して行われ（渥見 1977；90-91）、それらの活動の結実したものとして参政権獲得を実現した。

1960年代から始まった女性解放運動の第二期は、第一期の権利の獲得というような制度的なものではなく、人々の意識の中に潜む価値観の改革を目指して行われた。この活動は70年代にはいり、言語学のみならず、心理学、社会学、教育学、人類学、文学等の分野へと広がっていった。そしてこれらを包括的に扱う「女性学」という講座が多くの大学で設けられるようになり、ますます女性に関わる諸分野での研究が行われることを促した。特に言語については、各分野からその性差とのかかわりについての関心が急速に高まっていった。

言語と性差研究は1970年代にはいって特に活発化した。1975年に言語と性差研究に関する文献解題をまとめたThorne & Henley (1975)によると1901年からの60年間に書かれた論文が32しかないのに比べ、1961年から1970年までの10年間で34、さらに1970年から5年間で81の論文が書かれたことが示されている。さらに、1983年に出版された文献解題によると研究の数もさることながら、文献が幅広い分野にまで及んでおり、また他言語における言語と性差研究が多数含まれていることが注目される。

1960年代から約30年以上を経過してその研究のもととなる理論・方法論にも様々な変遷が見られる。本稿では Robin Lakoff、Dale Spender、Deborah

Cameron の研究を中心に概観し、それらが後の研究にどう影響を与え、発展していったか、また批判の論点は何かを明らかにし、今後の展望を探ってみたい。

2. Lakoff、Spender、Cameron の研究

文法理論の研究者、Lakoffは、*Language and Woman's Place* (1975) の中で、彼女が個人的経験を通して得た女性の話す言語の特徴として、語彙、付加疑問文、イントネーション、丁寧表現等を挙げると同時に女性を表す語彙や表現についても分析している。この研究の目的は、いかに社会が男性中心であり、そのことが言語の中にも反映されているかを示すことにあった。この研究は、後に Barrie Thorne、Dale Spender等に代表されるフェミニスト達によってLakoff自身、女性解放を目指しているにもかかわらず、彼女の研究はその主張の根底に「女性の言語」は劣るものという考えがあるとして批判されることになる。しかし、彼女の主張に対する、支持派、不支持派を含めて、この研究は、言語と性差という問題について人々の関心を集め、後の研究者達に大きな影響を与え、研究の基礎になったという点で意義深い研究であったと言える。

多くの研究者達はLakoffの主張をもとにその仮説の検証を始め、その結果として仮説を裏づけるもの、否定するもの等、様々な研究がなされた。中でも Dale Spenderは、Lakoffの研究によって代表される女性の話し方のステレオタイプ — 女言葉は男言葉より劣るとか、女は男よりおしゃべりである — 等の特徴を反証することから研究を始めた。これらのステレオタイプが生まれる原因として、言語、特に意味そのものの創造から使用に至るまでのすべてが男性中心に行われ、女性の存在はその過程に反映されてこなかったことが*Man Made Language* (1980) の中で挙げられている。そして、これまで信じられてきた様々な概念や考えは、男性だけの経験をもとに定義され、それがあたかも普遍的真実のように、男女双方に信じられてきたことも説明されている。このような男性による言語支配を打破るため、女性は公的な場で積極的に発言したり、書物を書き残すなどのいろいろなかたちで、女性の意見が人々の関心を集められるように努力していくべきだと主張されている。また、男性によって信じこまれてきた概念や考えは、女性の側から見れば、必ずしも正しいことではなく、これを是正するためには、これまで、女性の意見が社会に反映しないよう

にと、男性が女性を表現の場から遠ざけてきたことを認識し、この状態を変えていく姿勢が重要であると述べられている。

Deborah Cameron はその著書 *Feminism and Linguistic Theory* (1985)の中で、Spender を含む、急進的フェミニスト達の研究を分類し、特に言語の側面から検証している。彼女達の理論の基礎となっている、言語が人間の思考を規定するという言語決定論、支配階級がその支配力を駆使するために言語を自分のものにしていくという、男性による言語支配、さらに男性が言語を占有し、女性を意味の創造から使用に至るまで排除し、その結果、女性は、言語にかかわることから疎外させられ、沈黙を強いられてきたということについて反論している。Cameron は、言語を他の社会的要素から切り離して考えられるものではなく、様々な要素と絡みあった相互的なものとしてとらえている。さらに、男性が言語そのものを支配しているのではなく、言語使用にかかわる諸制度を支配しているから、それら諸制度と言語との関係を研究していくことが大切であると主張している。また女性は実際には、社会的に影響力の強い、高級言語¹⁾と Cameron が呼んでいるものから遠ざけられているが、その要因についても考察することが重要であると述べている。

2. 1. 1. Lakoffの研究 — 社会的に抑圧された存在としての女性の言葉

Lakoffは *Language and Woman's Place* (1975) の中で、女性の話し方が男性に比べ社会的に権力を持たないものになっている特徴を示した。この論文は、その後に言語と性差に関する多数の研究が生まれることに貢献した。彼女は個人的経験から直感した女性らしい話し方の特徴と、女性について話す時に使われる言葉の二つの側面から女性語の研究を行った。Lakoffによれば女性の話し方の特徴は、自己表現を否定し、内容についての話し手の自信の無さを表している。また女性について語る時、女性は一人の人間としてではなく性的な対象物であったり、男性より劣るものとされる。これは社会において女性が権力を持つことから遠ざけられ、従的な存在であることの反映であり、また女性自身そういう二次的な存在であることを仕方のないものと認めていることによるものであると結論づけている。

次にLakoffの挙げている女性の話し方の特徴を見てみたい。まず、女性は男

性があまり使われないような語彙を選ぶ傾向がある。女性は男性にとっては取るに足らないような、女性がより専門的な興味を持つ色彩語等において豊富な語彙を持っている。また、oh dear、goodness、oh fudge 等のやわらかい間投詞を多用する。一方、男性はshit、damnなどを使い、男女それぞれが多用する感情表現に違いが見られる。さらに、女性特有のdivine、sweet、lovely、adorable等、男性とは異なるempty adjectives(空の／意味の無い形容詞)²⁾の使用も女性語の特徴とされている。これらの語を男性が使用した場合は皮肉であるとか、何か特に意味があるような特別のことが考えられる。

さらに、普通、男性が叙述文でいうところを女性は付加疑問文を使ったり、文の終わりを疑問文のような上昇調のイントネーションを使う。これは、話し手として自分の主張に自信がないことや、断定を避け、相手の同意を誘うようにしているためとLakoffは説明している。この付加疑問文については、後に追跡研究が行われLakoffを支持する研究(Siegler & Siegler 1976)や反対の研究(Dubois & Crouch 1975, Holmes 1984)が行われた。

また女性は、well、y' know (=you know)、kinda (=kind of)、sorta (=sort of) のようなhedges (垣根言葉)とLakoffが呼んでいる陳述の内容を曖昧にする作用を持つ言葉を、男性より多用する。こういう表現は、話し手が話している内容について不確かな時や、あまり直接的にいうのは避けた方が良いと判断した時に使われる。しかし女性のhedgesの使い方は、これら二つの用法とは異なり、内容に十分確信を持っていて、その上、相手に不愉快な思いをさせるのではないかという気遣いも必要の無い時にも、敢えてこれらの表現を使うところが特徴である。これは、自己を主張したりすることは女らしくなく、レディにふさわしくないと信じこまされてきたことによるものである。同じような理由からI guess、I think、I wonder等を文の前につけたりし、自信の無さを表すのと同時に、その内容について責任を持つことを逃れようとしている。結局、これらは話し手の言っていることに権威がないという効果を生み出している。また、感情をはっきり出さない時に使うsoも女性の話し方の特徴とされている。I like him very much. に比べ、I like him so much. という方が、その好きな程度が、感情的にはっきりしない。very much を使うと、はっきり好きだということが表されるが、soを使うとその時の言い方でその程度が変わり、感

情的に表現することになる。

その他の特徴として、女性は男性に比べ規範的に発音し、乱暴な話し方はしないことが示されている。これは女性が幼い時から規範からはずれた発音をしたりすると、男性がそうした時より叱られる率が高くなるかに高く、女性は読み書き等の文化教養の維持者と見なされていることによると考えられている。

規範にあった話し方に加え、女性は男性より丁寧な言葉を使い、乱暴な表現は避けるとされている。つまり状況に合わせて言葉を使うことが男性よりも期待され、それができない者は「女らしくない、つまり男らしい」ということになり、女性としては伝統的な社交の世界では死んでも同然ということになる。これらの特徴をLakoffは一般的傾向として挙げており、男性より女性がこういう話し方をする傾向が強いと主張している。

2.1.2. Lakoffに対する批判

Lakoffの主張を検証するために行われた多くの研究のうちで、特に付加疑問文については賛否両方の結果が示された。Siegler & Siegler (1976)は、付加疑問文を含むいくつかの文を学生に見せ、それぞれの文について、その性別を当てさせたところ、付加疑問文の話者は女性と判断する者が多く、Lakoffの主張を裏づけることになった。しかし、Coates (1986)は、この結果が示しているのは、付加疑問文は女性により使用されたと判断する者が多いかもしれないが、実際に女性が付加疑問文を男性より多く使用していることの証明にはならないことを指摘している。

Lakoffの主張を否定するものとしてDubois & Crouch (1975)が行った学会での討論の分析によると、33の付加疑問文すべてが男性によって使用されたという結果が得られ、Lakoffが示した、女性の方が男性より付加疑問文をより多く使用するという主張に真っ向から反対している。しかし、このDubois & Crouchの研究は、付加疑問文をすべて一つのカテゴリーに入れ、それぞれの機能や用法を考慮していないところに問題がある。男性の方が付加疑問文をより多く使用するからといって、それにより「話者の自信の無さや、相手の意見を伺うという、権力の無い立場を示している」という結論になるとは限らないことを、後述するSpenderも指摘している。しかし、Dubois & Crouchはあたか

も付加疑問文の使用そのものが、権力の無さを示していると考えたところに、この研究の偏った考えが見られる。

それに比べ、Holmes (1984)の研究は付加疑問文を機能別にmodal(法的意味)を示すか、affective(感情的意味)を示すかに分けて分析した。³⁾これにより、会話において、話の進行役を演じる立場の時、女性の方が男性より付加疑問文をより多く使うという結果が得られた。またO' Barr & Atkins (1980)は、一つ一つの特徴について「男性だから…」 「女性だから…」といった一対一の対応の相関を越えた視点で研究を行った。この研究はLakoffの挙げた女性の言語の10の特徴に基づいて、法廷における証人の発話を分析した。その結果、これら、女性の話し方の特徴とされてきたものは、実は性別とは相関関係がなく、むしろ話し手の社会的地位や法廷における経験と相関関係があることが判明した。つまり、これらの特徴は社会的に権力のない言語によるもので、性別とは関係がなく、社会的地位の低い人の話し方に見られるものであることを示した。女性にこの権力のない言語を使う人が多いのは、女性だからではなく、社会における女性が権力のない立場にいたることが多いためであるという新しい視点を示した。

このようにLakoffの研究は多くの後続の研究を啓発したが、彼女自身、女性解放を目指しているにもかかわらず、彼女の研究は、特にフェミニスト達から攻撃された。その批判の中心は次の三つにまとめられる。

- (1) 直感や思いつきの観察による個人的経験からの研究で、実際のデータによる裏づけがなく信憑性に乏しい。
- (2) 「女性の言語」を「男性の言語」から区別しているということで、男性の言語が規範となり、女性の言語はそれから逸脱したもの、劣るものと考えている。
- (3) 社会変革が言語変革に先行しているという考えは誤りである。

特に「女性の言語」「男性の言語」の区別に関しては「女性の言語」の存在を全く否定するもの(Dubois & Crouch 1975)、その存在は認めてもLakoffの考えは間違っていると主張するもの(Thorne 1976)など様々である。Thorneは、Lakoffが「女性の言語」がよくないものであると結論づけているとして批判している。

さらに(3)の社会変革と言語変革については、Lakoffとフェミニスト達とは考え方が正反対である。Lakoffは社会が変革されてこそ、それが言語の変革に表れるのであって、フェミニスト達の主張している、言語変革を行い、人々の意識変革を生むという方針と異なる。フェミニスト達は言語差別は社会差別そのものであるから、すべての言語差別をなくしていこうという方針を持っている。

2.2. Spenderの研究 — 男性による言語支配の指摘

Spender は、その著書 *Man Made Language* (1985)の中で、これまでの言語と性差研究の主だったものの根底にあるのは、女ことば劣等説であり、女は劣るものであるという結論を得るため、男性に有利なように研究をもっていく傾向があったことを指摘している。そして特に、Lakoffの研究の前提には、女性の言語は劣るものというものがあるため、男性の言語は力強く効果的であるのに対し、女性の言語は曖昧で力がなく、内容のないものであるという前提に適した結果のみを注目してきたのではないか。そして、そうすることが男性にとって有利であるから、多くの研究は男性優位を支持するものになってきたという批判から論を進めている。

またSchulz (1975) と Stanley (1977) の二人の研究を用いて、女性が言語的に差別を受ける構造的な要因を示した。Schulzの研究は、女性に関係した語は、男性に関係した語とは反対に、意味が悪く、侮蔑の意味を示す度合いが次第に増える方向に進むというルールを見出した。この説を支持する Stanleyによると、これは、否定的な意味空間が男性により、女性にあてがわれてきた結果であると言っている。また女性は男性よりファースト・ネームで呼ばれることが多いことや、男性に対する敬称は Mr. 一つなのに、女性には Miss/Mrs. の二つが存在することなどを考えても女性が男性に比べ、社会から周縁的存在に追いやられようとしていることがわかる。

女性を男性の言語支配から解放するためには、社会に存在する男性／女性にかかわる語をすべてなくすか、或いは代わりの中立語を生み出すか、そのどちらがよいかという議論に関して、Spender はどちらも支持していない。語そのものではなく、男性／女性を直接表さない語でも、女性に使われれば否定、男

性に使われれば肯定になるという意味規則こそが問題なのだから、単に語彙を変えただけでは結果的に解決にはならない。性差別がどう働いているか、そのメカニズムを知り、今より肯定的な語彙を作ることが必要であると述べている。しかし、これら肯定的な語彙も社会が変わらなければ、意味がなく、言語変革も社会変革もどちらが先ということではなく両方共、相互的に重要であることを主張している。

これまでの女性の言語の丁寧さ、男女のピッチの違い、おしゃべりに関する多くの研究も女性にかかわるものは否定的、男性にかかわるものは肯定的と結論づけられてきた。中でも特におしゃべりについては、女性は男性に比べ、よりおしゃべりで、くだらないことをだらだら喋ると思われたきたが、実際の研究の結果は、女性より多く話したのは男性であった (Swacker 1975, Argyle et al. 1968, Strodbeck et al. 1957, Wood 1966)。Spender によれば、女性がおしゃべりであるという考えは、男性との比較ではなく、本来、女性は、男性によってつくられた言語を話すべきではなく、望ましいのは沈黙であるため、「沈黙との比較によるとおしゃべりである」という新たな視点を提供している。さらに、女性は男性の邪魔にならないよう黙っているのが好ましい状態であり、何を話すかを決めるのは男性で、つまり、権力を維持するために会話をコントロールしていると述べている。

なぜ言語や意味が男性によって支配されてきたかについて、女性は文化形式を作り出す過程から締め出され、また女性による学問は次世代に継続することから排除されたため、女性に関する語、例えば「母性」などという語の意味についても男性によって定義されてきたと Spenderは分析する。「母性」の意味には、お産の苦しさ、大変さなどは含まれず、実際とは違い、良い意味だけが広くいきわたっており、女性自身が感じているものとは違っている。また「女らしさ」という概念にも男性の考えるもの／女性の考えるものの二つが存在し、広く定義としてうけ入れられているものは男性によるものであることが Cornillon (1972)の研究を用いて示されている。

多くの学問分野が男性によってのみ受け継がれ、男性による男性中心の研究がなされてきたことはいろいろな研究者によって指摘されている。Spender は Ardener (1975)の研究により、人類学調査のデータを集める過程で、サンプル

としていかに女性が排除され、そのために女性の存在が無視されてきたかを示している。Ardener はある社会における人間全体のサンプルとして男性だけが扱われてきたことは珍しくなく、これまで示されてきた人類学のモデルは男性を対象に、男性によって形式化されてきたことを指摘している。しかし、社会によっては相手の性別により話し手の話し方が変わるので、男性研究者を相手に女性の被験者が女性同士で話す時と違う話し方をしていても、その違いは無視されてきた。さらに、女性研究者により得られた、女性被験者のサンプル等は、軽く扱われてきたことも指摘されている。

Spender (1980)は、女性達は、真実は男性によって示されたもの以外にも複数存在すること、男性によって公的に意見を述べづらいう立場を強いられてきたことを認識し、その立場を変える努力を積極的に行うべきであると主張している。

2.3. Cameron の研究 — フェミニスト達への批判

Cameron の研究の目的は記号学との関連において言語研究を検証することであり、これまでのフェミニスト達の理論を整理、批判し、彼女達が見逃してきた問題として、何故女性は、言語的に抑圧されてきたかに関して、その著書 *Feminism and Linguistic Theory* (1985) の中で独自の見解を示している。Spender 他の、男性が言語そのものを支配し、女性を意味の創造から排除しているという主張に対し、Cameron は、男性が支配しているのは、言語そのものではなく、言語使用を規定する諸制度で、これにより女性を抑圧していると反論している。さらに、言語学者は言語だけでなく、言語の制度的側面に注目すべきであることを強調している。

まず、フェミニスト達の主張に共通する概念の言語決定論、男性による言語の支配、女性の言語からの疎外に対する Cameron の反論をみてみよう。

言語決定論の提唱者の Edward Sapir と Benjamin Lee Whorf は、アメリカインディアン人のホビ族が欧米人と異なった時間の概念を持つのは、彼等の言語が時制体系を持たないためと説明している。これに対し、Cameron によるとホビ族は歴史的、経済的理由から欧米式の時間概念とは別のものを持つ必要性があったから言語としてもそうなったという正反対の説明を与えている。あるものに

関する語彙がたくさんあるのは、それが初めに作られた時のことを考えれば、必要だったからである。ホビ族は、欧米人とは異なる時間概念を持つ生活を営んできたから、その生活に必要な固有の時間概念を持ち、欧米的な文法的時制が生まれなかったと Cameron は説明している。

次に、Spender の男性が言語・意味を支配し、女性は意味の創造から除外されていると主張していることについて、Cameron は女性が学問的世界から排除されてきたからといって、何も伝統的な知識を持たなかった証拠にはならないし、さらに、言語と知識は別であるのに Spender は二つを混同していると指摘している。また男性が意味を支配している例として「母性」という語を挙げ、男性が良い意味だけを与えたため、女性が示したい内容が含まれていないので女性は自分の経験を表現できないことや、男性にかかわる語は良い意味に、女性にかかわる語は悪い意味を示すようになる意味規則などについて、Cameron は大切なのは意味とはどのように作られ学ばれるか、そして男性によって、何故、どのように構築されるかを明らかにすることこそ重要であるのに、Spender の説明では不十分であると指摘している。また、言葉の意味は固定されたものではなく、その解釈の仕方は個人によって異なるのであるから、たとえ辞書が男性中心に意味を規定しようとして、個人の解釈までは支配することは不可能としている。

さらに、女性の言語からの疎外については、男性が自分の経験を表現するのと同じくらい、女性が自分の経験を表現できないと考えるべきではなく、女性の言語からの疎外は他の理由によるものであることが指摘されている。

このように Cameron は、Lakoff、Spender 等、フェミニスト達の諸説を考察し、それに批判を与えた。彼女の説によれば、言語使用に関わる制度はほとんどが経済的社会的に権力を持つ男性によって支配され、女性は抑圧されてきたが、これは特に、発展途上国における被抑圧者としての女性に対するものであることが指摘されている。彼女は、Kaplan (1978) の、女性は最も強い威信ある言語から遠ざけられているという主張を支持している。威信ある言語というのは、政治、文学、演説や宗教的、法的、社会的儀式などの公的な場で使用される言語を意味するが、こういう公的な言語が男性の言語として規定されているため、女性は言語的に不利な立場に置かれているということである (中村

990;234)。たとえば、男性は女性を教育、つまり読み書きから排除することにより、女性の知識と意識に影響を与え、女性を学問領域の言語に接しないようにしてきた。読み書きができるようになって女性が公的に発言できるようになることは男性にとって脅威であるため、その機会を制限することで、女性を権力の立場から排除し、社会的に影響を与えることのないように女性を遠ざけてきたと解釈する。

一方、近代産業社会では、様々な組織、制度が複雑化し、社会的人間関係をうまく営んでいく上では、「コミュニケーションの技術」が重要になってきたことを Gumperz (1982) の研究を用いて説明している。Gumperz は、組織・制度側の人間が、英語を話す東洋人と交渉する際、双方が異なった会話のルールに従うことで生まれる誤解について研究している。Cameron はこの誤解の生まれる構造を男性・女性の関係に当てはめ、公的場における修辭的な言語は男性に支配され、女性は疎外されてきたことを挙げている。

3. まとめと展望

Lakoff、Spender、Cameron の研究を概観する時、各々の理論的背景を考へることは、重要である。Lakoffは、生成変形文法理論の方法をその考へを導き出す上で利用した。Spender は、教育、歴史などから言語と性差研究へと進んだ。一方、Cameron の考へは、文芸理論や哲学に大きく影響を受けている。

現実の男性・女性の話し方の違いを前にして、この違いがどこから生まれたかを考へる時、Lakoffは、女性は社会的に男性に支配されてきたため、その被支配を表す言語を話すことを期待され、また女性自身もそうあるべきと思い、権力支配をしないようにする話し方をしていると説明している。一方、Spender は男性が言語そのものを支配する立場にあり、言語の意味の創造から、その使用に至るまで女性を排除してきたため、言語自体が男性のためのものであり、それ故に女性は沈黙を押しつけられてきたと主張している。さらに、Cameron は Spenderの言うように男性が言語自体を支配することは不可能であり、むしろ、社会的経済的制度により女性を権威のある言語領域から遠ざけてきたと説明している。この三人の背景と立場の違いは、女性がこれからどういう立場を取って、女性の社会的地位の向上を目指していけばよいか、またどう

いう研究が必要かを考へていく上で重要である。

Lakoffは、女性の地位が向上するまで、当分の間は、女性も男性と同じような話し方をしていく方が賢明であると言い、Spender は、女性達が結束して、自分達の意見が反映できるようなネットワークを作り、女性自身の意識を改革し、女性の話し方を考へていくべきだと主張している。また、Cameron は、男性に支配されているのは、言語そのものではなく、言語使用にかかわる諸制度であるので、言語を与えられたものとしてとらえるのではなく、言語は使うことによりその意味が常に変わっていくことを意識し、女性達自身が非差別的言語を生み出していくのだという積極的な態度で使用していくべきであると指摘している。

ここで、三人の見解の問題点を検討してみよう。まず、三人に共通する問題としては、その理論の背景がつねに欧米社会・文化中心であることが挙げられる。それも特に、白人中流階級の男女の英語をもとに、あたかもそれが、普遍的に男性語・女性語の特徴を示しているかのように、議論が進められてきている。

しかし、実際は文化人類学の研究が示してきたように、男らしさ、女らしさの問題には、社会・文化により違いがある。その古典的研究の代表である、Mead(1950)のバプア・ニューギニアにおける Arapesh、Mundugamor、Tchambuli の三つの島における研究を見てみよう。Arapesh 島では男女両方が、アメリカ社会では一般に女性的と考えられている子育てに関わり、両性とも攻撃的ではない。反対に、Mundugamor島では、両性が、アメリカ社会で一般的に男性的と考えられているように、攻撃的、暴力的で子育てにそれ程関わらない。一方、Tchambuli 島では、男女の性格は、Arapesh、Mundugamorにくらべると各々異なるが、その異なり方がアメリカ社会で考えられている男女のステレオタイプとは正反対であることが示されている。女性が経済の主体となり、常識やビジネスの世界にたけており、反対に男性は、自分自身を着飾ったり、他人との噂話に主な関心をよせている。また Hall (1966)によればイランでは、泣いたりして感情を示すのは、男性の特性であり、そうでない男性は人間的でなく頼りにならないとされ、アメリカ社会における、男性は感情をあまり表さないほうがよいという考へと反対である。さらに、女性の体力についても、アメリカ社

会では、男性の体力より劣るとされているが、Albert (1963) によると、アメリカでは女性が農業の主役となり、男性は生まれつき、重労働をしないものとされてきている。

Gregg(1985)によれば、アイルランドのInis Beag 島とポリネシアのMangaia 島では、人々の性に対する考え方は全く異なる。Inis Beag 島では、性は公に話されるものではないと考えられている。そのため、子供に対して性教育は行われず、男女の接触もほとんど行われない。小さい時から大人になるまで、男女は別々に育てられ、婚前交渉は少なく、独身者の割合も多い。女性は性交渉については、義務に耐えるというように否定的態度である。一方、Mangaia 島では反対に、性教育は公に行われる。男女は公的には一緒にいることはないが、婚前交渉は一般的である。男女とも性に対して、積極的で、楽しむものと思っているというところが、Inis Beag 島と対称的である。つまり、自然発生的と思われている性についても、社会により、違いがあることがわかる。

これらの研究は、ある社会における男らしさ・女らしさ、また性に対する態度は、相対的なもので、文化によってはその関係が正反対であることを示している。このように考えると、同じように、威信のある話し方、権力のある話し方というものも、文化によって異なる。Lakoff等三人の研究が挙げている権力のある話し方のいくつかの特徴は、ある特定の社会においては、という前提に立たなければならないのである。

さらに、McCormnell-Ginet (1988) はLakoffの研究はアメリカ白人中流階級の女性の話し方に限られ、中流階級黒人女性の話し方は、そこに表れていないことを指摘している。また Cameronは、Labov (1972)の黒人の子供が白人の子供とは異なる言語文化を持っているという研究を紹介し、女性と男性の関係に似ていることを示した。しかし、同様の問題が、英語圏／非英語圏の研究の関係に見られる。英語圏の研究には、それだけで、男女の話し方の普遍的特徴を示しているかのような議論が進められているが、実際には、いくつかの社会の一つにすぎないことを意識する必要がある。

次に彼女達の理論が男性語・女性語の普遍的特徴を表していない理由として日本の社会について考えてみよう。瀬川 (1979) の研究によると日本の農村社会では女性は重要な労働力とされてきた。農家の家庭では、家庭内の経済のき

りもりは女性に任されてきた。欧米と違い、多くの現代日本の家庭においても、得た収入の分配の権利を握るのは女性である。公的には、男性に比べ、女性の地位は低いが、家庭内における女性の権利は男性に比べ、低くないことが示されている。こう考えてみると、たとえ、同じ男性語・女性語の言語現象が欧米社会／日本社会に見られたとしても、その現象に対する説明は、各々異なったものにならなければならない。

本研究でこれまで見てきたように、アメリカ、オーストラリア、イギリスという英語圏で始まり進められてきたフェミニズムにかかわる言語研究は、こういう問題をかかえているということを確認した上で、これからの言語と社会における男女語及び、男女の研究を行っていく必要がある。

注

- 1) Cameron は、Cola Kaplan が使用した "high language" という用語を使い、社会的に権威があり、影響力を持つという意味を表している。
- 2) これらの語は、男女両方が使用可能だが、比喩的に使われた時、特に女性用と思われる。
- 3) Holmesは、modal(法的) 機能を持つ付加疑問文は話し手がどれくらい内容について確信を持っているかを示し、相手に確認を依頼する機能を持つことからspeaker-orientedと呼んでいる。一方、affective(感情的) 機能を持つ付加疑問文は聞き手に対する話し手の態度を示すことからaddressee-orientedと呼び、さらに聞き手を励ます付加疑問文と口調を和らげる付加疑問文の二つに分けて分析を行っている。

参考文献

- Albert, Ethel M. 1963. The Roles of Women: A Question of Values in S.M. Farber and R.H.L. Filson (eds.). The Potential of Woman. New York : McGraw-Hill, 105-115.
- Ardener, Edwin. 1975. Belief and the problem of women. in Shirley Ardener(ed.), Perceiving Woman. Malaby. 1-28.
- Argyle, Michael, Mansur Lalljee and Mark Cook. 1968. The effects of visibility on interaction in a dyad. Human Relations 21. 3-17.

- 渥美育子. 1977. 「女性運動の英雄像」. 『アメリカ研究』. 11 : 90-101.
- Cameron, Deborah. 1985. *Feminism and Linguistic Theory*. London: Mcmillan.
- 『フェミニズムと言語理論』. 1990. 中村桃子訳. 勁草書房.
- Coates, Jenifer. 1986. *Women, Men and Language: A Sociolinguistic Account of Sex Differences in Language*. London: Longman Group UK Limited.
- Cornillon, Susan Koppelman. 1972. The fiction of fiction. in S.K. Cornillon(eds.). *Images of Women in Fiction: Feminist Perspectives*. Ohio: Popular Press, Bowling Green. 113-30.
- Dubois, Betty Lou and Isobel Crouch. 1975. The question of tag questions in women's speech: they don't really use more of them. do they? *Language in Society*. 4 : 289-94.
- Gregg, Y. Joan. 1985. *Communication and Culture*. Belmont: Wadsworth Publishing Company.
- Gumperz, J. John 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (ed.). 1982. *Language and Social Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Edward T. 1966. *The Hidden Dimension*. Doubleday. Garden City N.Y.: Anchor Books.
- Holmes, J. 1984. Hedging your bets and sitting on the fence: some evidence for hedges as support structures. *Te Reo*. 27: 47-62.
- Kaplan, Cora. 1978. *Language and Gender, Papers on Patriarchy*, Lewes, Sussex: Women's Publishing Collective.
- Labov, William. 1982. *Sociolinguistic Pattern*. University of Pennsylvania Press.
- Lakoff, Robin. 1975. *Language and Women's Place*. New York: Harper & Row.
- McConnell-Ginet, Sally. 1988. Language and gender. *Linguistics : The Cambridge Survey*. Cambridge: Cambridge University Press. 75-99.
- Mead, Margaret. 1950. *Sex and Temperament in Three Primitive Societies*. New York: New American Library. Mentor Books.
- O' Barr, William M. and Atkins, B.K. 1980. 'Women's language' or 'powerless language?' in McConnell-Ginet et al.(eds.). *Women and Language in Literature and Society*. New York: Praeger. 93-110.
- Schulz, Muriel. 1975. The semantic derogation of women, in Barrie Thorne and Nancy Henley(eds.). *Language and Sex: Difference and Dominance*. Rowley, Mass.: ewbury House. 64-75.
- 瀬川清子. 1979. 「日本女性の百年 主婦の呼称をめぐる」. 『女性学ことはじめ』. 講談社. 99-125.
- Siegler, David M. and Robert S.Siegler. 1976. Stereotypes of males' and females' speech. *Psychological Reports*. 39: 167-7.
- Smith, Dorothy. 1978. A Peculiar Eclipsing! Women's Exclusion from Men's Culture. *Women's Studies International Quarterly*. I, no.4. 281-96.
- Spender, Dale. 1980. *Man Made Language*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Stanley, Julia. 1977. Gender marking in American English. in A.P. Nilsen et al., *Sexism and Language*. Urbana: NCTE [11, 44-76.
- Strodtbeck, Fred. Rita M. James and Charles Hawkins. 1957. Social status in jury deliberations. *American Sociological Review*. 22: 713-19.
- Swacker, Marjorie. 1975. The sex of the speaker as a sociolinguistic variable, in Barrie Thorne and Nancy Henley(eds.). *Language and Sex: Difference and Dominance*, Rowley, Mass.: Newbury House. 76-83.
- Thorne, Barrie. 1976. Review of Robin Lakoff's *Language and Woman's Place*: *Journal of Women in Culture and Society*. Vol. 1. no.3.
- Thorne, Barrie and Nancy Henley(eds.). 1975. Difference and dominance: and overview of language, gender, and society, in Thorne Barrie and Nancy Henley. (eds.). *Language and Sex: Difference and Dominance*. Rowley, Mass: Newbury House. 5-42.
- Wood, Marion. 1966. The influence of sex and knowledge of communication effectiveness on spontaneous speech. *Word*. 22, nos. 1,2,3. 112-37.
- Young, John. 1985. *Communication and Culture*. Belmont: Wadsworth Publishing Company.